

新しい視点からの感染制御やがん・自己免疫疾患治療法を目指して

琉球大学大学院医学研究科 寄生虫・免疫病因病態学講座 教授 岸 本 英 博



2013年1月1日より寄生虫・免疫病因病態学を担当させて頂いております岸本です。琉球大学医学部初代医学部長で赴任された大鶴正満教授、同じく琉球

大学医学部発足当初からの二代佐藤良也教授が築いてきた伝統ある教室を受け継ぎ、新しい感性で解かなければならない問題が多く残っている寄生虫を含めた感染症に対する防御・制御に重点をおいた研究と論理的な思考を身につけるような教育を行っていききたいと思います。

私は名古屋で生まれ育ちましたが、自然溢れる開放的なキャンパスに憧れて北海道大学に進学しました。医学部を卒業後すぐに東京大学医学部の多田富雄教授のもとで免疫学の研究をスタートしました。この時に、多田教授から事象を多角的に捉えることを学び、時・環境の変化とともに刻一刻と変化する複雑で厄介な免疫現象に魅せられました。その後、多田教授の助手として1年勤めた後に1993年から約12年の間、ここ沖縄のように青い空と海、軍の基地がある南カリフォルニア／サンディエゴ近郊ラ・ホイヤ市のスクリップス研究所にて研究を行っていました。初めの8年間はジョナサン・スプレント博士と共にT細胞の分化に関わる“自己とは”という哲学的な題目を、助教授として独立してからは、自己免疫疾患発症に関わるT細胞の役割を研究していました。2004年

の秋、多田先生が東大を退官された後に設立された東京理科大学生命科学研究所に帰国しました。

東京理科大学では、初めてポスドクや医学部の学生以外の一般的な理系の学生たちを教えていました。彼らは研究者になるために大学院に進学する訳ではなく「就職」を目標にしている学生です。モチベーションの方向が異なっているため、明確なゴール設定と社会にどう繋がるかを納得しないと真剣に研究に取り組まなかったことで“社会に理解される事”を意識するようになりました。また、全く異分野（文化）の工学系や理学系の研究者たちと交流する機会が増えて、共同研究の幾つかを立ち上げました。この異分野交流は、沖縄で解かなければならない離島医療に必要な情報系の研究者も参加しています。

私を採用していただいた理由は、上記のように特異な国際経験と医学部だけではないバックグラウンド、理学・工学・芸術と幅広い研究者ネットワークを持っていることが評価されたものと思っています。大らかで伸びしろを多く所持している琉球大学医学部の学生を多角的に論理的に物事を捉え、先を見る事ができるように教育し、沖縄県や中央から求められている沖縄独自の先端医療を支える人間を育てていきたいと思っています。琉球大学医学部医学科同窓会の皆様からのご助言、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。